

ルイ14世とボーヌ

Louis XIV and Beaune

榎本 恵子

大妻女子大学文学部

Keiko ENOMOTO

Faculty of Humanities, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：ルイ14世，ボーヌ，リヨン，オスピス・ド・ボーヌ

Key words : Louis XIV, Beaune, Lyon, Hospices de Beaune

抄録

本報告は、フランス王宮をヴェルサイユ宮殿に定めたルイ14世とボーヌ市についての調査結果である。

なぜこんなところにルイ14世の軌跡があるのかという偶然の出会いと疑問から始まった建築物と史実の照合を数年前から調査しているが、今回分かったことを含めルイ14世とボーヌについて報告する。そこには王太子誕生に対する母后アンヌ・ドートリッシュの思いとルイ14世のリヨン旅行の際に立ち寄ったボーヌ市での行動の理由、後世に名前が残っている理由があった。本報告はパリのヴァル・ド・グラース、ボーヌのカルメル会幼子イエズスの聖地、オスピス・ド・ボーヌについて史実と照合した報告者の体験記録である。

序

本報告は令和5年度競争的研究費での研究の副産物であるルイ14世とボーヌについての報告である。

近年フランスでは、17世紀フランス演劇の市場に関してパリの劇場だけでなく、郊外の演劇活動についての研究がなされている。ソルボンヌ大学教授ベネディクト・ルーヴァは2023年2月から6月のThéPARis-Franceセミナーにおいてアンシャン・レジム期のフランス演劇についての共同ゼミを開催した。全4回のセミナーはパリ、リヨン、トゥールーズ、ヴェルサイユで開催された。17世紀のフランス演劇を理解するためにはパリの劇場を研究するだけでは十分ではないからだ。例えばフランス演劇はイタリアの影響を強く受けており、イタリアへの窓口となるリヨンは、アンシャン・レジム期の演劇にとって重要都市のひとつである。

執筆者これまで、ルイ14世の表象と権力の関係あるいはモリエールの評価を検証する際、パリとヴェルサイユを中心に見てきた。しかし、リヨンの

のベルクール広場の中央に騎乗のルイ14世の像が据えられているのを見て調べると、太陽王来訪の記念に建立されたものであった。広場の名前も現在のベルクール広場になるまで何度も変わったがその過程で何度かルイ14世の別称、ルイ・ル・グラン広場と呼ばれた。またボーヌにはいくつかの軌跡が残されていることを知り、ホテル・ル・セップや修道院などを調査してきたが、今回本研究費で念願叶ってオスピス・ド・ボーヌの「国王の部屋」の特別見学をすることができたので、ここにルイ14世とボーヌの関係について報告する。

1. L'Eglise de Val de Grâce ヴァル・ド・グラース

国王ルイ13世とアンヌ・ドートリッシュの不仲は有名で、アレクサンドル・デュマは『三銃士』の中で、彼らを取り巻くさまざまな陰謀と国のために動くダルタニャンと三銃士が活躍する冒険譚を繰り広げ読者を惹きつけた。実際、彼らは20年もの間世継ぎに恵まれなかった。そして王妃は王太子誕生のあかつきには聖母マリアに捧げる教会を

建立する誓いを立てた。その誓いを実現したのがパリにあるヴァル・ド・グラース教会である。ドーム型になっている天井にはルニャールによる「祝福の栄光」のフラスコ画が描かれている。この絵には 200 人ほどの聖人に囲まれた母后アンヌ・ドートリッシュが神に感謝している姿が描かれ、母后がいかに子宝に恵まれたことを感謝しているかが見受けられるし、モリエールの天井画を称える詩からも窺い知ることができる^{注1)} [1]。

このアンヌ・ドートリッシュの感謝の意を表したことが遠いボヌの地にも残っていることが分かった。それはルイ 14 世のリヨン旅行の時のことであつた。

2. Hôtel Le Cep Beaune ホテル・ル・セップ

1658 年、20 歳になったルイ 14 世はリヨンに向かった。フランドル戦争が勃発し、その平和条約を結ぶことと若き王の結婚が取りざたされた時期、宰相マザランにより「リヨンへの旅」が早急に企画された。ルイ 13 世の姪、ルイ 14 世にとっては伯母にあたるサヴォア公妃クリスティーヌ・ド・フランスに会うためである。彼女には年頃の娘がいたからだ。

ラ・グラン・マドモワゼル(モンパンシエ公爵夫人マリー・ルイーゼ・ドルレアン)はそのころルイ 14 世がマザランの姪のマリ・ド・マンチーニと恋に落ちたことに気付いたと書き残しているの、それを避けて別のしかるべき血筋のある女性との結婚を進めるためであつたと考えられる。しかし母親のアンヌ・ドートリッシュはスペインの王女との結婚を進めたがっていた[2]。

いずれにせよ、ルイ 14 世のリヨン行きは早急に進められた。ボヌの古文書の資料には「市の助役たちは、1658 年 11 月 14 日の」臨時会議の場で、ルイ 14 世がリヨンにいるサヴォア公妃クリスティーヌ・ド・フランスに会うため、中継点として 11 月 19 日我々の市にルイ 14 世が行幸することを知らされた」と記されている[3]。

ルイ 14 世の同行者は、母后アンヌ・ドートリッシュ、弟アンジュ公、オルレアン公の長女ラ・グラン・マドモワゼル、マザラン枢機卿、宮廷のお付きのものたちである。陛下の軍隊が守るサン・ニコラ門から入城が予定された。

サン・ニコラ門はボヌ市をぐるりと回る城壁の北にある門で郊外から南下した時に入る城門跡である。現在城壁はなく環状道路から市内へ入るところに門のみが現存し当時を想起させる。古文書には次のように続けられている。

国王はジル・ブルネ殿の邸宅にお泊まりになることになった。現在のホテル・ル・セップである。王妃はコキエユ殿の邸宅にアンジュ公はドラマール嬢の邸宅、枢機卿はミル殿の邸宅に宿泊が決まった。

このホテル・ル・セップは現在四つ星のホテルで、当時のブルネ邸の趣を残したままホテルに改築されている。スイートにはプルゴーニュ特級畑の名が冠されているが、私が泊まった部屋はサン・フェリックスで、部屋まで案内してくれたホテルマンが 18 世紀に遡るクロ(プルゴーニュのワイン畑の中でも石垣に囲まれた小地区)であると説明してくれた。ロビーを抜け部屋に行く途中の中庭に胸像が設置されている。これがルイ 14 世であつた。初めはルイ 14 世がボヌに立ち寄ったことを知らなかったためなぜここにと疑問が湧いた。次にここまでルイ 14 世が来ていたことに驚いた。ホテルマンは、興味があるならホテルのカーヴの責任者に案内してもらうようにとアドバイスをくれた。カーヴの責任者は、その頃はまだコロナの影響で人を入れていなかったカーヴと隣接した隠れ家的バーレストランを案内してくれた。そしてこのホテルの 2 階のスイートのひとつがある場所にルイ 14 世が宿泊したのだと教えてくれた。もっとも部屋は改装され当時の姿ではないこと、客室となっているからと中を見せてもらうことは叶わなかった。

カーヴに入ってまずホテルが所有しているオスピス・ド・ボヌの樽を紹介された。と同時に後述するがコルトン・シャルルマーニュに太陽王のキューヴェがあることを知った。

これらのことから、フランス宮廷がまだ移動型であつた際、宿泊地での宿泊先の割り振りなど、当時の「移動」の一端を伺い知ることができる。おそらく部屋の完備が整っていない場合などを想定して、モリエールの父親のような「王室付き室内装飾業者」が国王に随行していたのであろう。

3. Sanctuaire de l'enfant Jésus

幼きイエズスの聖地 カルメル修道会

古文書によると、国王は翌日 9 時ごろ側近を連れてカルメル会修道院を訪れた。

(そこでは)ミサが執り行われていた。次に修道院を訪れ、幼子イエズスの礼拝堂を通り、サン・サクルマンのマルグリットの墓前に跪いた。彼女こそが王妃アンヌ・ドートリッシュが子供に恵まれるように祈った人である。そしてその子供が後のルイ 14 世である。(略)今日、ジャン広場にある礼拝堂にはそのことを記したプレートが掲げられている。

ボヌ市内中央のノートルダム寺院の近くにある礼拝堂がそれだということで回った。古文書に記されている通り門の上に「ボヌのカルメル会サン・テティエンヌの修道院跡地。1658 年 11 月 20 日ルイ 14 世が宮廷と共に来訪」と「ボヌの幼子イエズス崇拝の祖である聖体のマルグリットはここで 1630 年 9 月 23 日生まれ、1648 年 5 月 26 日没した」と掲げられているだけであった。それ以上かつての名残はなく、そこで開催されていた絵画展の主催者も責任者も誰も歴史について知る人はいなかった。そこで観光所で聞き、彼らが見たという幼子イエズスの像が移されたという修道院へ走った。

ボヌの街の門のひとつがサン・ニコラ門であるがそこからほど遠くないところを地図は指していた。しかし、入口のようなものが見当たらない。門を鳴らしても誰も出てこなかった。たまたま子供たちのリクリエーションに来ていた団体がいたので聞いてみると、マ・スールを呼んできてくれた。

「ここは一般の方は入れないですよ」と眉をひそめながら、それでも何のためにここに来たのかと尋ねてくれた若いマ・スールに 17 世紀フランスについて研究している研究者で日本から来たこと、観光局に聞いてたどり着いたこと、その日に乗る電車の時間が決まっていることなどを話すと、年配のマ・スールを呼んできてくれた。またしても言われた。「ここは普通の人は入れないですよ」と。「でもせっかく来てくれたのだから、あなたの探しているもの、それ以上のものをお見せしましょう」と修道院の中を案内してくれた。

そして修道院の 2 階にある創始者であるマルグ

リットの墓を見せてくれた。「そう、ここが、アンヌ・ドートリッシュが世継ぎの誕生を感謝して跪き手を合わせたところです」。そう言って額の中に入ったアンヌ・ドートリッシュのサインのある紙を見せてくれた。それが終わると、さあ、もう時間ですよ。教会の扉から出なさい、と送り出された。先程の教会から移管された幼きイエズスの像は修道院に隣接の教会にあり、そこは一般公開されていた。

以下が幼きイエズスの会の沿革である[4]。

- 1619 年 マルグリット・パリゴ誕生
- 1630 年 マルグリット、ボヌのカルメル会に入会、マルグリット・デュ・サン・サクルマンと名乗ることにする。彼女はイエズスが「私の小さな妻よ、私はあなたを私の娘とし、あなたは永遠に私のものとなる」と言うのを聞く。
- 1632 年 イエズス、マルグリットに悔悛を勧める
- 1635 年 マルグリットの誓願
- 1636 年 幼きイエズス修道女会の発足
- 1637 年 マルグリット、アンヌ・ドートリッシュの懐妊を本人より先に知る
- 1638 年 ルイ 14 世の誕生
- 1639 年 幼きイエズスへの奉獻・礼拝堂建立を計画
- 1643 年 ガストン・ド・ランティ男爵が精神的な友情の証として幼きイエズスの奇跡の像を奉納
- 1648 年 マルグリット息を引き取る
- 1658 年 母后アンヌ・ドートリッシュ、国王ルイ 14 世とボヌを訪れた際、マルグリットの墓前に跪く
- 1791 年 革命の際、革命家たちは修道院が所有していたブドウ園を含む財産を没収、売却
- 1792 年 修道女たちは国有財産となった修道院から立ち去る
- 1836 年 14 rue de Chorey にカルメル会の入会式が行われ、マルグリットの墓が新しいカルメル会に移される。

これが現在まで続く幼きイエズスの修道院であり、見せてもらった幼きイエズスの像、マルグリットの墓がボヌ市内の教会ではなく、サン・ニコラ門を一步外に出たところにある修道院である。ボヌの古文書はルイ 14 世がカルメル修道院を

訪れた後、施療院を訪問したことを記している。

ボーン滞在中、国王は施療院を訪れた。その部屋は「国王の部屋」と呼ばれるところとなった。ルイ 14 世は「聖霊信徒会」の帳簿に署名した（ある記録には 11 月 19 日、ある記録には 20 日とある）。

この施療院がオスピス・ド・ボーンであり、今回特別見学において訪れた場所である。ここの司書のブルノー氏が当日のガイド役の司書に連絡を取っておいでくれ、ボーン滞在中滞りなく見学することができた。

4. Hôtel Dieu Hospices de Beaune

オスピス・ド・ボーン

オスピス・ド・ボーンの施療院は 1443 年、ニコラ・ロラン夫妻によって、貧しい人たちのために建てられた。

貧しく治療費の払えない人々のための病院としても運営されるようになったが、その運営費用は、初代ニコラ・ロランが自身の所収するブドウ畑を寄進し、そこで作ったワインを売った利益であった。1457 年に始まった。その後、ワインは志ある者によって、あるいは病気が治った人々が感謝の意を込めて自らの所有するぶどう畑を寄付し、その畑から作られるワインの収益によりまかなわれていた。この「奉仕の心」に胸を打たれた人々によって、オスピスにはワイン畑がどんどん寄進されるようになった。ブルゴーニュ各地の優良畑（1 級畑、特急畑）から寄付され、キュヴェは寄付した人の名前が付けられる。したがって、ボーンのニコラ・ロランキュヴェ、コルトン・シャルルマーニュの太陽王のキュヴェがある。ちなみに、太陽王の名を冠したキュヴェのあるコルトン＝ルナール畑は 1584 年、シャルロット・デュメイがオスピス・ド・ボーンに寄付した畑である。1658 年ルイ 14 世は施療院訪問の折、手当を出したが、それを記念して「太陽王のキュヴェ」と命名された。品種はシャルドネ（白ブドウ）である。

現在ワインチャリティオークションとして世界中の資産家、著名人が集まる最古のワインチャリティオークションが 11 月第 3 日曜日に開催され、その週末金・土・日は「栄光の 3 日間」と呼ばれている。収穫されたブドウはオスピス・ド・ボーン

の醸造所でオークションまでの期間醸造され、樽詰めされる。そして落札後、樽のまま引き渡される。自社で熟成、ボトリングができる場合は樽を持ち帰りその後の工程を自社で行うが、それができない人は、ネゴシアンを通して入札・落札し、約 18 ヶ月の熟成後、ボトリングしてもらったものを受け取る。落札した人の名前がラベルに記載される。

オスピス・ド・ボーンの建物の裏庭にはカーヴがある。3 部屋から成る地下室とその先にカーヴがあった。そこにはコルトン・シャルルマーニュの太陽王のキュヴェ、ボーンのニコラ・ロランのキュヴェを始めとする各村のさまざまなキュヴェの樽がずらりと並んでいた。カーヴの入口には上部の壁側に 1785、鉄の格子の飾りにオスピス・ド・ボーンの紋章と共に 1786 と彫られていたのでこのカーヴはその時既に機能していたことを意味している。

「王の部屋」

「王の部屋」と命名されたルイ 14 世が訪問した際に通された部屋は 2 階にある。2 階の回廊の窓枠は淡い色のステンドグラスがはめ込まれているところとそのままになっているところがある。ステンドグラスから見る中庭は優しく、ステンドグラスのないところからは、フランドルの鮮やかな屋根と空の青が眩しく目に映る。階下を見下ろすことができ、そこから見える病室は高い天井とステンドグラスから差し込む陽光によって部屋を明るく照らされていた。

「王の部屋」の壁は紺地に金色の王家の紋章がちりばめられた壁紙で彩られ、やはり王家の紋章が彫られた暖炉の上にはルイ 14 世の肖像画が飾られていた。その向かい側の壁にはこの施療院の創設者ニコラ・ロランと関係の深かったブルゴーニュ公フィリップ・ル・アルディ（1432-1404）、フィリップ・ル・ボン（1396-1467）、ジャン・サン・プー（1371-1419）の肖像画が飾られていた。ルイ 14 世の肖像画を見て左側に奥に続く扉があり、その扉を開けると材質の異なる小さな扉がある。その扉の奥は古文書が整理されて保管されていた。展示されていたものは教皇ピウス II 世（1405-1464）のメダイユがついた書簡であった。おそらくこの施療院が聖霊信徒会の仕事として教皇に認められたことを意味したものである。

結語

ボーヌの街にあるルイ 14 世の軌跡が、市民および街を訪れる人々すべての琴線に触れているわけではない。しかしそのどれもが着実に残されており、その場を担う人々が守っていた。今も活気づく街に「存在し続ける」彼らの軌跡を見つけて嬉しくなった。そしてその遺産を担っている人々が手を差し伸べてくれたからこそ、私はその歴史に触れることができた。

フランス絶対君主制を確立した太陽王と、その母の人間臭い一面を見ることで、歴史書に書かれた文字で綴られた人物たちが 3 次元の世界に飛び出し、現在とは分断されたはずの過去が突然今の自分と繋がった不思議な感覚が身体全体をめぐったこの貴重な体験をもたらしてくれた競争的個人研究費に感謝の気持ちでいっぱいである。

注

注 1) ドームの周りにラテン語で記された、この教会が「幼子イエズスとその母である聖母に捧げられる」という言葉が、イエズスがルイ 14 世、聖母マリアがアンヌ・ドートリッシュを指していることも忘れてはいけない。扉や地面のモザイク画にルイ 14 世のイニシャル「L」とアンヌ・ドートリッシュの「A」が組み合わせられた図柄があちこちにみられ、この教会が王家を称えるものとなっていることを物語っている。

謝辞

現地調査は、人の温かさがあるからこそ成しえる。名前を聞くことはできなかったが、ホテル・ル・セップのカーヴ責任者、カルメル修道院のマ・スールの方々、オスピス・ド・ボーヌの司書の方々、ボーヌ市観光局の方々、すべての人に感謝したい。そして、この研究調査を可能にしてくれた人間生活研究所に感謝の意を表したい。

引用文献

- [1] モリエール. ヴァル・ド・グラース教会の天井画を称える詩. 秋山伸子訳. “モリエール全集” 第 7 巻. 臨川書店, 2001, p.240-266.
 - [2] Forestier, Georges. “Molière”. Gallimard. 2018, p. 112.
 - [3] “Louis XIV à Beaune : quand le Roi vient ensoleiller la ville”. (2017 年 12 月アップロード). <https://archivesbeaune.wordpress.com/2017/12/25/louis-14-a-beaune/>. (参照 2025-3-3).
- 以下古文書からの引用はこの資料からの引用である.
- [4] “Chronologie” Archive de l’enfant jésus de Beaune. <https://archives.sanctuaire-beaune.org/chronologie>. (参照 2025-3-3).

付記

本研究は令和 4 年度海外研修及び令和 5 年度大妻女子大学戦略的個人研究費 (N2303) の助成を受けたものである。

(受付日 : 2025 年 3 月 15 日, 受理日 : 2025 年 4 月 14 日)

**榎本 恵子（えのもと けいこ）**

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科准教授

プロフィール：

パリ第4（パリ＝ソルボンヌ）大学フランス文学・比較文学科博士過程修了（博士，文学）

専門はフランス17世紀演劇。現在フランス17世紀喜劇，ルイ14世治世下の演劇，ヴェルサイユの祝祭，現在21世紀におけるモリエールの日仏上演に関する研究，フランス・イタリア史とワイン史に関する研究を行っている。

主な著書：

『毎日1文 筆記体でフランス語』（単著，白水社），『混沌と秩序－フランス十七世紀演劇の諸相』（共著，中央大学人文科学研究所研究叢書60号），『フランス17世紀演劇事典』（分担執筆，中央公論新社）

近年の論文（単著）：

「令和の日本にもたらされたモリエールの笑いー井上ひさし『金壺親父恋達引』ー」，大妻女子大学コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第23号，2025，pp.45-64

「モリエール年のコメディ・フランセーズ（2）エリック・リュフに聞く」，大妻女子大学コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第22号，2024，pp.25-45

「モリエール年のコメディ・フランセーズ」，大妻女子大学コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第21号，2023，pp.1-20

「日本におけるモリエールの受容」，大妻女子大学コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第20号，2022，pp.1-25

「ドン・ジュアンあるいは神話となった男の運命」，大妻女子大学コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第19号，2021，pp.1-11